

札幌シンフォニカ・マンドリーノ 第31回定期演奏会

本井 理

総評

自分が当事者として参加した演奏会のレポートを客観的に書くのは難しいが、他団体の論評ばかりしているのは不公平なので、敢えて私情を捨ててまとめることとした。無論、演奏に関する反省も多々あるが、本文を通じて同好の皆様方に社会人団体における運営上の問題点を提起できれば幸いである。

さて、他の同好団体と同様、私どもにも定期演奏会に欠かさず御来聴いただいている御客様がある。その方々から一様に指摘されたのが昨年より人数が減ったことと、メンバーが入れ替わったということであった。

確かに今回の出演者数は前年の44名から19名へと大幅に減少した。無論、仲間を増やそうという努力を怠った訳ではないが、「人数の多寡と演奏の優劣は比例しない」というのが私どもの団体および主宰者である森田太郎先生のスタンスである。集まりが悪いのは、どちらかという演奏曲目が主因と思われ、現代曲も含めて余りなじみのない初演の新曲ばかり並んでいるので、何となく難しそうに感じて敬遠されてしまったのだろう。

選曲の特殊性は、集客の面でもデメリットになっているのかも知れないが、過去に取り上げた（あるいは学生時代に演奏した）作品ばかり牛の反芻のように繰り返して演奏するのでは、何の進歩も期待できないと思うのだ。

一般に、人数が減ると生じるデメリットとして思い当たるのは、音量であろう。しかし、マンドリンという楽器は、トレモロ奏法を主体にした楽曲構築を行わんとする限り、いかに名手を集めても全体では擦過音（ピックが弦に当たる際に生じる「カチカチ」「パタパタ」「ポコポコ」音）が余韻を上回り、人数が増えるほど音質が汚くなってしまふ。擦過音は楽曲構築には不必要な要素なのだ。

また、マンドリン・ギター合奏は何人集まろうが、音量では絶対に管弦楽や吹奏楽に太刀打ちできない。そして擦弦楽器や管楽器と同じことを演じるのであれば、別にマンドリン・ギター合奏で取り上げる必要はないのだ。

ただ、今回の定期演奏会にお越しいただいた御客様からは「音が小さい」という声よりも、むしろ「意外によく響いていた」との御言葉を多くいただいた。自慢ではないが我が

意を得たりである。これには科学的な理由があり、その第一は日本でも有数の性能を誇る演奏会場の音響特性を味方に付けたことと、第二は音質に気を配って聴衆の聴き入ろうとする意欲を喚起した心理効果によるものである。

もう一つ御指摘をいただいたメンバーの入れ替わりについてであるが、19名中、前年出演者は13名で、継続出演率7割弱という数字は他団体と比較してもそれほど低いとは思えない。「メンバーが入れ替わった」という印象を持たれたとしたら、それは首席奏者の交代によるものであろう。

経緯を語ると長くなるが、事の発端は昨年開催した第30回定期演奏会に遡る。

その前に述べておきたいのだが、「札幌シンフォニカ・マンドリーノ」という団体は札幌地区で演奏会を毎年開催している他の社会人同好4団体と決定的な違いが二つある。

第一に、私どもは、

1. 主宰者の森田先生が私費を投じて建築した練習場で、
 2. 主宰者の森田先生が私費を投じて収集した楽譜により、
 3. 主宰者の森田先生が私費を投じて購入し、あるいは修理した楽器も借りて、
 4. 主宰者の森田先生が声を掛けて集めた（自ら育てた弟子を含む）奏者が、
- 演奏活動を行っており、端的に言えば平等に会費を集めて運営されている団体ではない。

もちろん、森田先生は若手奏者に溶け込もうと積極的に話し掛けているし、よいと思うものは積極的に取り入れ、無理難題を独裁的に押し付ける方ではないが、主宰者の意向を無視した組織運営はしてはならないし、選挙で役職を決定するといった行為も馴染まないであろう。

第二に、私どもは、新譜やノウハウを所属団体に持ち帰っていただくことで発展に寄与できるとの観点から参加費を無料にするなどして学生さんを大歓迎しているが、社会人については基本的に他団体との重複参加を歓迎していない。これは「どちらかという音量より音質を重視する」という前述のスタンスからも当然であろう。私もマンドリン・ギター合奏を通じて芸術として評価に足る音楽をめざしているため演奏会にはそれなりに懸けているものがあり、同時期に開催される他団体の演奏会に出ようとは思わないし、できれば一緒に演奏する仲間にも掛け持ち参加はしてほしくない願っている。

ただ、マンドリン・ギター合奏の世界には、音楽的素養も感性もないのに指揮者や首席奏者などの役職に就きたがる人間や、芸術的成果を得ることよりも出演する行為そのものが自己目的化して多数の演奏会に掛け持ち参加している人間が多いのが実情である。当然、そのような人物は団体および主宰者のスタンスとは相容れないこととなるが、思えば札幌

シンフォニカ・マンドリーノの歴史は彼等との相剋そのものでもあった。そうした相剋が解消されぬまま30回目の定期演奏会を迎えることになったのである。

まず開催に先立って「札幌シンフォニカ・マンドリーノを応援する会」なるものが結成されたが、定期演奏会に毎年参加していたD夫人が発起人になっているのが理解に苦しむ所である。D夫人のような方は一般に現役会員と呼ばれるが、応援するということは退会して部外者になったということなのだろうか。もちろんD夫人も出演するので、その意図は理解できず、今もって真意が分からない。さらに同会によって過去の出演者が召集され、独自の練習を始めたのも不可解である。一方、「特別のことはせずに」という主宰者の意向に反して「記念演奏会」という名称が既定の事実であるかのごとく一人歩きを始めた。

こうして集まった過去の出演者には、仕事や育児の多忙により活動から遠ざかっていたので往時を懐かしんで参加した方々と、スタンスが相容れずに去っていった人々とが混在していた。そして後者の人々は、いずれも主宰者の同意を得ずに勝手に出演し、当時の己の非について一言も詫びることなく記念写真に納まったばかりか、当然のように打ち上げにも参加した。

要するに30回の節目であるのを機に、自分から勝手に去って行ったのにもかかわらず「追放された」と逆恨みし、去った後は主宰者を誹謗中傷して足を引っ張ってきた連中が許されたという既成事実を作り、さらに酒の席を利用して森田先生と和解させようという動きがあったということだが、善意で参加されたり、参加できないからとお志まで寄せていただいた方々に対しては本当に申し訳ないことだったと思う。

実は、私も2002年以降、団体の演奏活動から遠ざかっていたのだが、森田先生から「過去の参加者が出演するのなら、当然出るべきだ」と強く参加を勧められた。どうしたものかと訪問させていただいた際の先生の焦慮の様子は見た目にもはっきり分かるほど痛々しいもので、少しでも心の支えになればと参加を決めたのだが、私が登場したのは最大の誤算であったのかも知れない。

こうして第30回定期演奏会は当初の意図とは異なる結末で幕を閉じたのであるが(?)、本年2月になって次なる問題が発生した。「日本マンドリン連盟」北海道支部の役員改選に際して、首席奏者のS氏が役員選考委員長に就任し、草創期からの功労者を根こそぎ排除して自らが理事に就任したのである。

森田先生は1994年2月から「日本マンドリン連盟」の北海道支部長を務めていたが、1998年2月の支部総会で弊会退会者のK氏が「支部長として不適格だ」と攻撃し、翌1999年2月の支部総会で結託して役職から引き摺り下ろした上、自ら役員に就任した。

弊会は、主宰者の音楽理念に対する支持が得られなかったと受け止めたので、団体会員を退会し、引き続き支部役員に留まることを選んだA氏については以後の活動参加を御遠慮いただくこととしたのである。

こうして森田先生を排除したA氏やK氏は、長らく選挙で決めていた役員を「選考委員会」なるものが指名するように規約を変更して今日まで意のままにしているのであるが、両氏とも第30回定期演奏会に主宰者の了承を得ることなくことなく押し掛け出演を果たしたのだった。

弊会は日本マンドリン連盟には団体加盟しておらず、その活動にも特に期待するものがないが、今回のS氏の行動を許して首席奏者としての出演を認めれば、A氏に対する措置と比較して不公平の謗りを免れない。また、A氏、K氏、S氏、そしてD夫人とも他団体との掛け持ちをよしとする点で弊会の音楽理念や運営方針に反しており、とりわけS氏やD夫人については自分が指揮を振っている団体にメンバーを引き込むような行動も見られたので、これ以上の勝手な行動は看過できない状況に至ったと判断された。

このように本来の演奏活動以外で次々と事件が起こり、森田先生の心痛は察するに余りあるものがあったので、私は独断でS氏に活動への参加辞退を勧告する書簡を送付した。

こうしてS氏は顔を出さなくなり、一件落着かと思われたのだが、事態は思わぬ方向に飛び火した。奥様方が集って活動している弊会の姉妹団体（D夫人やS氏夫人も参加）の一部の会員が「S氏を復帰させないと退会する」と回答期限を設けて森田先生を脅迫したのである。いずれも森田先生が私に命じてS氏を追放させたと信じていたと聞かれるが、その間、当事者の私に対する問い合わせ等は一切なく、S氏からも抗議や反論はなかった。S氏から森田先生への接触もなかったと聞かれるので、当事者との直接交渉は避けて汚い裏工作を仕掛けていたとしか解釈のしようがない。

結局、彼女等は退会し、今年10月2日に開催を予定していた定期演奏会も中止の止むなきに至ったのであるが、主宰者が同じとはいえ運営も会計もまったく異なる団体の人事に介入しようとする発想や行動は、どう考えても不条理である。

もちろん、弊会で首席奏者を務めてきたメンバーの中にもS氏に同情して定期演奏会への参加を見送る向きがあった。以上が御客様に「メンバーが入れ替わった」という印象を与えた真相であり、その一義的な原因は、私が独断でS氏に書簡を発信したことにある。それこそ「主宰者の意向を確認せずに行動した」ことになるので慙愧に堪えないが、私とS氏、どちらの行動に理があったかは、本文を読んだ皆様方に判断を委ねたい（私の名前には「理」があるが…）。

この結果、必然的に若手奏者を前面に押し出した編成で演奏に臨むこととなったが、一昨年以前より荒削りな面も多々あったものの「任せてみたら、結構できる。なかなかやるじゃないか」というのが私の偽らざる感想である。そして何よりも奏者と共に団体全体がぐっと若返り、明るく爽やかな雰囲気変わったのは、慶ばしい限りである。

以下、反省を込めて録音を聴いた感想を加味した寸評を述べる。

弦楽四重奏曲へ長調 (カール・フィリップ・シュターミツ／マルガ・ヴィルデン＝ヒューズゲン編曲)

やや長かったが冒頭にふさわしい華やかな作品で、第1・第2楽章はまずまずだった。ただ、第3楽章のジョイント部の速弾きがかなり乱れた。練習不足！

マンドリン・オーケストラのための小舞曲 (ツェザール・ブレスゲン)

舞曲としてのリズムのパターンが読みやすく、現代ドイツのオリジナル曲を多数手掛けてきた弊会にとっては与し易い楽曲構造でもあった。仕上がりもまあまあだったと思う。

マンドリン・オーケストラのための小舞曲 (クルト・シュヴァーエン)

こちらは舞曲の名前を冠した創作曲のためリズムの型がつかみにくく、練習時には速度をアップして軽快にしようとしていた。本番ではそれほど速度が上がらず、本来の持ち味は重厚さにあったことが分かったのは怪我の功名だが、ちょっと危なかった。

序曲「戦場にて」 (サルヴァトーレ・ファルボ＝ジャングレコ／松本譲編曲)

この演奏については、冒頭のマンドセロが光っていた。2人とも腕よし楽器よし(ルックスもよし!)で、おたく奏者が狂った音程で擦過音や奇怪な振動音を発しつつ楽器を掻き鳴らす「キモセロ」の固定観念を打破した。ファンクラブができそう！

イタリアの童謡による5つの変奏「ティペラタテュペティ」 (クラウディオ・マンドーニコ)

RPG系のテレビゲームの音楽に展開が似ているので、若い奏者は楽しく弾いていたようだが、指揮者はかなり苦勞していた。実は、この曲は途中でストップしてしまうのではないかという懸念があったが、本番の出来が最高だったので安堵している。

マンドリン・オーケストラのための合奏曲「バルカン組曲」 (ゲルハルト・ローゼンフェルト)

第1・第2楽章はよかったが、第3楽章はカラーのリズムパターンが最後までつかめず、個人的には納得できなかつた。おそらく御客様も、この楽章がスッキリしなかつたのではないだろうか?なお、プログラムの曲目解説は完璧を期したのだが、ローゼンフェルトが2003年に逝去している事実を反映できなかつた。難しいものである。

ト調のシンフォニア（アッリーゴ・カペレッティ／中野二郎編曲）

今回の演奏曲目でもっとも難易度が高く、十分に仕上がっていない状態で演奏に臨み、何とか止まらずに弾き終えたというのが実感である。音楽として論評の対象外といわれても受け入れざるを得ない。ただ、面白い作品なので、他日、完璧な形に仕上げたの再演を誓いたい（2005.11.12.19:00～、札幌コンサートホール「k i t a r a」小ホール）。